

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330245

研究課題名(和文)多言語・多文化教材の開発による学校と地域の連携構築に向けた総合的研究

研究課題名(英文)Comprehensive Research for the Construction of Cooperation between Schools and Local Community by Developing Multilingual and Multicultural Teaching Materials

研究代表者

山西 優二 (Yamanishi, Yuji)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：50210498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円、(間接経費) 4,260,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国際理解教育等において重要な概念の一つとされつつある多言語・多文化主義さらには複言語主義の立場から、地域社会・学校の言語を取り巻く現状を踏まえつつ、それらの現状に即した多言語・多文化教材を開発することである。そのためにまず国内外での多言語・多文化状況の実態調査、多言語・多文化に関する教育実践、教材についての調査を行った。

さらにそういった実状を考察した上で、教材のテーマを「ことばと感性」「ことばをとりまく問題」「ことば(日本語)と文化」「メタ言語能力」「小学校実践教材」としその5つのテーマのもと多様な教材を40以上開発した。さらにウェブサイトを開設し開発した全ての教材を一般公開した。

研究成果の概要(英文)：This project aims to produce teaching materials in terms of multilingualism and multiculturalism which is one of the most important concept in international international education based on the situation at schools and local community. We conducted survey on the multilingual and multicultural situation in Japan and foreign countries, educational practices and teaching materials.

Based on these survey, we decided our teaching material's theme: "language and sensitivity"; "problems concerning language(s)"; language (Japanese) and culture; "meta-language skills" and "teaching materials in primary schools" and produced more than 40 materials. In addition, we have opened all materials we produced to the public through website.

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：多言語・多文化 教材開発 多文化共生 ことばと感性 日本語教育 メタ言語能力 言語意識 ことばをとりまく問題

1. 研究開始当初の背景

我々は、日本国際理解教育学会における特定課題研究「ことばと国際理解教育」において、地域・学校における日本語教育、外国語教育、国際的な言語政策など、広く「ことばの教育」に関して国際理解教育を切り口としながら議論してきた（日本国際理解教育学会(2010)『国際理解教育』Vol.16 参照）。その中の重要な課題として浮上してきたのが、学校及び地域における言語・文化的少数派の問題と国際理解教育としての「ことばの教育」のあり方である。

一方で、平成 23 年度全面実施の学習指導要領により、英語を原則とする外国語活動が必修として導入されようとしている。これまで国際理解の一環として広く行われてきた英語活動が「国際理解教育の矮小化」と指摘されながらも、国際理解教育と外国語活動・英語活動との関係、その指導内容、方法、日本人多数派児童や言語・文化的少数派児童の言語・文化観への影響などについて充分議論がなされないまま、事実上英語のみの外国語活動が動き始めている。

このような問題状況を踏まえ、我々は、日本国際理解教育学会特定課題として 2007～2009 年の 3 年間に亘り、国内の日本語教育や外国語教育の立場からの分析や実践研究及び国外の言語政策・言語教育政策、などにおける、文化の多様性やそれを踏まえた多言語主義・複言語主義政策の調査を通じて検討を重ねてきた。課題として、我々の示した方向性に即した「ことばの教育」に、学会等で蓄積されてきた多様な文化的な教育の視座を加味し、具体的な指導内容、方法を提案する必要があることが浮き彫りになった。

2. 研究の目的

本研究は、国際理解教育等において重要な概念の一つとされつつある多言語・多文化主義さらには複言語主義の立場から、研究背景で述べたような地域社会・学校の言語を取り巻く現状を踏まえつつ、それらの現状に即した多言語・多文化教材を開発すること、そして学校や地域における言語的文化的少数派児童（生徒）と多数派児童（生徒）、在住外国人と日本人とを結ぶ多言語・多文化教育実践を提案すること、をねらいにしている。

3. 研究の方法

(1)教材開発の前提：(ア)言語・文化的少数派児童とその保護者等への聞き取り調査、(イ)ヨーロッパ諸国における言語環境、言語教育政策、学校での教育実践及び教材等の調査、(ウ)学会・研究会・研修等を利用した小学校教員・日本語教員への働きかけ
(2)教材開発の進め方：上の(ア)(イ)で得られた資料を基にチームにわかれて教材開発
(3)教材を使用した実践とその成果測定：関東、関西の小学校及び地域日本語教室等において、開発教材を使用した授業を可能な限り長期に亘って実施し、その前後で学習者を対象に調査

4. 研究成果

(1)調査から明らかになった視点

国内外における多言語・多文化教育実践の聞き取り、参与観察等の調査を経て明らかになった視点は以下のとおりである。

①教材開発プロセスへの当事者の参加

ベルリンにおいては、行政側と移民側が協議を重ねる方法を取り、教材プロセスの過程で当事者である移民（メンターとしての「地域の母」）が最初から参画することが、積極的参加や責任感の醸成に繋がっていた。外国人住民と日本人住民の協働参画で作り上げられた岐阜県可児市の舞台などの例も見られた。

②企業・地域活動・教員研修が一体となった複言語教材開発

ロンドンには、企業活動・地域活動・教員研修などを一体的に担っている機関において、複言語教材が作成されていた。

③地域社会の市民性教育を志向する言語的多様性と一言語内の文化的多様性に着目した教材作成

イギリスにおける代表的な 3 つの開発教育に関わる団体のリソース・センター訪問し、以下の教材を収集した結果明らかになった。

④問題解決型および少数派が親しむ物語を取り上げたデジタル教材利用

ストラズブルでは、言語的多数派と少数派が登場人物となり、共通の問題解決を行う多言語絵本を収集した。ヨーロッパ・スクールでの授業実践からは、言語的少数派のそれぞれの言語グループのほとんどが知っている童話を利用した多言語教材を、デジタル絵本として開発する示唆を得た。

⑤多言語ポートフォリオ・言語地図の活用

フィリピン政府の外国語教育政策に対応し、国際交流基金マニラ日本文化センターが実施していた中・高等学校の日本語教員研修において、『en Tree』という教材を用いた言語ポートフォリオの活用が観察された。また、My Language Biography（フィリピン語・英語以外の言語能力を暮らす内で共有し、共有・振り返り能力の育成）、および My Language Map（自分のことばの歴史を振り返り、ことばの大切さや世界のことばとの出会いに関して、視覚的な気づきを導く）を活用していた。

⑥音や踊りを通した多言語・多文化感覚の学び等

ジャグジャカルタの「人間には創造性が一番大切」という理念を掲げる私立小学校、養護学校などにおいて行われた、現地と日本人のアーティスト達が協働するワークショップを見学した。ガムランやダンスといった、アートを通した実践から、多言語多文化的な感性を育むための示唆を得るとともに、ひとりではできないこともあえてひとりではやらず、わかちあいながら行うというガムランの基本姿勢からも共生とは何かという示唆を得た。

(2)多言語・多文化教材開発の視点の提示
調査や理論研究を経て、ことばを「道具」としてとらえるだけでなく「対象」としてとらえる視点が必要であることがあきらになった。ことばを「対象」ととらえるとことばのもつ「多様性」「身体性」「文化性」「問題性」がみえてくる。

これまで言語教育では、ことばを「道具」、「コミュニケーションの道具」としてとらえることが多かったため、「話す」「聞く」「書く」「読む」といった能力の形成に力点を置いてきた。また言語教育による国際理解教育的実践という場合も、多くが「道具としての言語」を活用して、世界の文化や問題事象を学ぶといったものが多かった。

一方、国際理解教育の視点から「ことば」をとらえ直してみると、「道具」としてではなく、ことばそのものを「対象」「学習対象」としてとらえることが可能であることに気づかされる。たとえば以下に示すようなことばのもつ多様性、身体性、文化性、問題性といった特性は、ことばの世界の豊饒性と奥深さを示している。

- ① 多様性：ことば・言語の多様性
- ② 身体性：ことばに内在する音・身体性・霊性
- ③ 文化性：ことばに内在する文化性
- ④ 問題性：ことばを取り巻く個人的社会的問題



これら4つの特性は、国際理解教育の視点からことばへアプローチする際に想定される学習目標を基礎に想定したものであり、これらの特性は交錯し合いながら、そこに学習内容・学習方法が具体的に加味されることで、多様な実践が生み出されることになる。またことばを扱う国際理解教育実践は、言語教育実践と双補完関係にあり、国際理解教育からのことばへのアプローチが、言語教育が担ってきた「話す」「聞く」「書く」「読む」といった言語能力の質の向上に大きなインパクトを与えることも想定できる。

(3)教材開発

「ことばと感性」「ことばをとりまく問題」「ことば（日本語）と文化」「メタ言語能力」という4つのチームわかれ、教材開発を行った。

結果として、45以上の教材を開発した。「ことばと感性」では、『多言語で味わう（25の音）』として、アイヌ語、インドネシア語、ウズベク語など25言語の音声の教材、民話

をテーマにした教材などを開発した。「ことばをとりまく問題」では、『自分にとってたいせつなことば』や英語を相対的に見直す教材などを作成した。「ことば（日本語）と文化」では『挨拶』や『文字』などからことばと文化の関係への気づきを促す教材をつかった。「メタ言語能力」としては、『月の名前』など多言語を扱いその共通性やルールを類できるようにする教材が作成された。さらに以上の4つの教材の視点を取り入れながら、『世界の挨拶』『12か月の言い方』『おもしろ言語カルタ』『言語クイズ』『文字を書いてみよう』『いろいろなことば』『自分ことばマップ』という教材を開発した。

(4)開発教材を用いた実践と評価

開発した教材をもとに研究協力者である小学校教諭が公立小学校で実践を行った。

開発された教材がいかに子どもたちを変化させたかを、教材を使用した実践の前後における質問紙調査によって捉えようとしたが、結論としては、全体として教育目標に向けた変化がわずかながら見られたものの、短い実践期間であったことから明確な大きな変化は見られなかったことが言える。この調査においては測定の課題と妥当性の課題が挙げられるが、最大の課題は、学習成果の把握には長期的な視点が必要である中、本研究で扱うことを試みた概念には生涯に渡る感覚的変化も含まれていたにもかかわらず、短期間の成果を捉えようとした点である。初めての試みが多く含まれたこともあり、予備調査によって本調査の質の確保を期待したものの、今後はより継続的な学習成果の測定が求められる。

新しいことばの教育の評価のあり方を今後模索するという課題が明らかになったが、本教材では、元来、異文化および異なる言語への想像力などを活用することが想定されている。教材によっては、想像力を越え、妄想力、幻想力にまで至るものもある。特に、これから英語教育の開始が低年齢化されることをふまえれば、ことばを用いて何かを作ったり、伝えたり、あるいは伝えられなかったり、という多様な経験を味わうこと自体が、評価の対象となる。たくさんの言語を流暢に操れること自体が評価につながるわけではない。自己と自文化を相対化し、脱中心化する、ということこそが肝であり、たとえモノリンガルな人間であろうと、母語と同様に他者にとっての母語の尊厳を尊重できるならば、この活動では評価が高くなるといえるが、そのような評価の具体的なあり様を示すことも今後の課題であることを示唆できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

- ①岩坂泰子(2012)「小学校における多言語活動実践の仕組み作りの重要性」『関係性の教育学』第12号, pp. 33-44、査読有
- ②岩坂泰子・大山万容・吉村雅仁(2013)「グローバル教育における多言語活動」『グローバル教育』第15号, pp. 44-57、査読有
- ③大山万容(2012)「フランスにおけるニューカマーの子どもへの言語教育支援－CASNAVの取り組みと複言語主義教育の可能性－」『人間・環境学研究』第21巻, pp. 121-132、査読有
- ④岡本能里子(2012)「メディアのことばの変化」『日本語学』第31巻11号, 明治書院, pp. 28-37、査読有
- ⑤黒川悠輔(2013)「国際理解教育における批判的言語意識(Critical Language Awareness)の意義」『国際理解教育』第19号, pp. 3-12、査読有
- ⑥服部圭子(2013)「理系学部における授業外の言語文化活動－B. O. S. T. Language Spaceの実践報告－」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』第3巻第2号, pp. 155-167、査読無
- ⑦山西優二(2013)「エンパワーメントの視点からみた日本語教育：多文化共生に向けて」『日本語教育』第155号, pp. 5-19、依頼論文
- ⑧NISHIYAMA Jean Noryuki, Mayo OYAMA. (2013) « Eveil a la pluralite et hegemonie linguistique. D'un enseignement precoce de l'anglais a une education internationale au Japon », dans Pierre Martinez (dir.) Dynamique des langues, plurilinguisme et francophonie en Asie de l'Est. La Coree. Editions Riveneuve, Collection Actes Academiques, Paris. pp. 195-204.
- [学会発表] (計18件)
- ①大山万容「外国語教育を通じた異文化間理解教育?初等・中等教育における多面的アプローチの可能性を探る?」(異文化間教育学会、2012年6月9日、口頭発表)
- ②黒川悠輔「国際理解教育における批判的言語意識(Critical Language Awareness)の意義」(日本国際理解教育学会第2回研究大会、2012年7月14日、埼玉大学)
- ③佐藤美和・岡本能里子・服部圭子「男ことば・女ことばを『国際理解する』-日本語教育実践の現場から-」(日本国際理解教育学会第23回研究大会、2013年7月6日、広島経済大学)
- ④竹本紗野香「国際理解教育における民話のもつ可能性」(日本国際理解教育学会第23回研究大会、2013年7月6日、広島経済大学)
- ⑤服部圭子・岡憲司「留学生をテーマとした日韓共通教材の作成と実践」(日本国際理解教育学会第21回研究大会、2011年6月19日、京都橘大学)
- ⑥宮野祥子「英国の開発教育教材にみることば・多言語に関する教材の特徴」(日本国際

- 理解教育学会第22回研究大会、2012年7月14日、埼玉大学)
- ⑦横田和子「共生のための言語教育実践に向けて-大学生を対象とした演習から-」(日本国際理解教育学会第23回研究大会、2013年7月14日)
- ⑧山西優二・吉村雅仁・藤原孝章・岡本能里子・服部圭子・丸山英樹・横田和子「多言語・多文化教材開発プロジェクト(2011?2013年度科学研究)の中間報告」(日本国際理解教育学会第2回研究大会、2012年7月14日、埼玉大学)
- ⑨山西優二・秦さやか・黒川悠輔・宮野祥子・岩坂泰子・大山万容・丸山英樹「ことばの学習-多言語・多文化教材を活用した新井小学校での実践」(日本国際理解教育学会第23回研究大会、2013年7月14日)
- 10 吉村雅仁「小学校における国際理解教育としての外国語活動の可能性」(国際研究集会2012.9「年少者への言語教育の可能性と展望:バイリンガリズムか、複言語主義か」(招待シンポジスト)2012年9月9日、京都大学)
11. Shoko Miyano, "The Roles of Japanese Education for Citizenship Education in Local community". 14th annual Children's Identity and Citizenship in Europe Conference, 8th CitizED Conference. (23 May 2012)ポスター発表
12. Mashito YOSHIMURA, Yasuko IWASAKA & Mayo OYAMA. "A Pilot Project of Multilingual Activities in a Lower Secondary School in Japan". 4th International Congress EDiLiC. Aveiro, Portugal. (17 July 2012) 口頭発表
- [図書] (計3件)
- ①片岡邦好・池田佳子編、岡本能里子ら著(2012)『コミュニケーション能力の諸相-変移・共創・身体化-』273-397頁
- ②森住衛監修/関西言語文化教育研究会・研究論集編集委員会編、服部圭子ら著(2013)『言語文化教育実践-言語文化観をいかに育むか-』金星堂, pp. 239-261
- ③北脇保之編、山西優二ら著(2011)『「開かれた日本」の構想-難民受け入れと社会統合-』ココ出版, 128-147頁
- [その他]
- ホームページ等
<http://prj-tagengo2013.com/>
 (<http://www.waseda.jp/prj-tagengo2013/> に移行予定)
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
 山西 優二 (Yuji Yamanishi)
 早稲田大学・文学学術院・教授
 研究者番号: 50210498

(2) 研究分担者

吉村 雅仁 (Masahito Yoshimura)
奈良教育大学・大学院・教育学研究科・教授
研究者番号：20201064

岡本 能里子 (Noriko Okamoto)
東京国際大学・国際関係学部・教授
研究者番号：20275811

服部 圭子 (Keiko Hattori)
近畿大学・生物理工学部・教授
研究者番号：30446009

藤原 孝章 (Takaaki Fujiwara)
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：70313583

丸山 英樹 (Hideki Maruyama)
国立教育政策研究所・国際研究・協力部・主任研究官
研究者番号：10353377

岩坂泰子 (Yasuko Iwasaka)
奈良教育大学・教育学部・特任講師
研究者番号：80636449

(3) 連携研究者

横田和子 (Kazuko Yokota)
目白大学・人間学部・専任講師
研究者番号：80434249

(4) 研究協力者

阿波根寛英 (Hirohide Awane)
香芝市立香芝西中学校・教諭

大山万容 (Mayo Oyama)
京都大学大学院・人間・環境学研究科・博士後期課程

黒川悠輔 (Yusuke Kurokawa)
早稲田大学大学院・文学研究科・博士後期課程

佐藤美和 (Miwa Sato)
立教大学大学院・異文化コミュニケーション研究科・修士課程

竹本紗野香 (Sayaka Takemoto)
早稲田大学大学院・文学研究科・博士後期課程

秦さやか (Sayaka Hata)
中野区立新井小学校・教諭

宮野祥子 (Shoko Miyano)
早稲田大学大学院・文学研究科・博士後期課程